

いじめ被害者が加害者へと変化しないための周囲の対応 —大学生への調査をもとに—

栗本 顕¹ 新井邦二郎²

本研究では、いじめを受けたときの被害者へのケアに着目し、どのようなケアをどのような人物から受ければ、いじめの連鎖に歯止めがかかるかについて研究を行った。

調査協力者は大学生341名（男性172名、女性169名）。質問紙法を用いて小学生高学年・中学生時代にいじめを受けたときの周囲の対応（ケア）の具体的な内容とその対応（ケア）に対する満足点（0～100点）を尋ね、いじめを受けた経験のない人には想像して回答するように指示をした。また、どのような対応を受けるといじめを受けた人がいじめる側になるのか、ならないのかについて自由記述で回答を求めた。

量的分析の結果では、約4分の1の人がいじめられた後にいじめる側になったと回答があった。学校の先生のケアに対する満足点が他の人の点数よりも低かった。しかし、質的分析において先生のケアの内容と他の人のケアの内容の違いが見受けられなかったことから、先生への期待の高さゆえとも考えられる。

いじめ被害者が加害者へと変化する周囲の対応の仕方を見ると、周りからの不完全なケアや周りに受け入れられなかったこと、責任の帰属といった被害者の気持ちを受け入れず、曖昧なケアや被害者に合わないケアがあること、やり返すことを促すといった言葉かけなどがみられた。他方、いじめ被害者が加害者へと変化しない周囲の対応の仕方では、話を聞いてもらう対応やいじめ再発防止的関わり、加害者になることへの抵抗要因、被害者の気持ちに共感し、周囲の人からのポジティブなサポートのケアがみられた。

これらのことから、いじめ被害者が加害者へと変化しない対応のあり方について示唆が得られた。

キーワード：いじめ被害者、いじめ加害者、いじめの連鎖、周囲のケア（対応）

問題と目的

近年、いじめに関わる児童・生徒の自殺問題が衆目を集め、教育の分野のみならず社会的にも深刻な問題として認識されるようになった。例えば2006年10月に起きた「福岡中2いじめ自殺事件」や2011年10月に起きた「大津市中2いじめ自殺事件」など、教育現場に大きな衝撃を与えた事件が後を絶たない。文部科学省（2014）によると、2014年度のいじめ認知数は合計185,860件と、前年度よりも若干少ないものの、前々年度の約2.5倍となっており、この他に認知されていないものもあることが推測されるため実際のいじめの件数はさらに多いことが考えられる。

我が国では「いじめ防止対策推進法」（2013）において、いじめは「児童生徒に対して、当該児童生徒が在籍する学校（※）に在籍している等当該児童生徒と一定の人的関係にある他の児童生徒が行う心理的又は物理的な影響を与える行為（インターネットを通じて行われるものを含む。）であって、当該行為の対象と

なった児童生徒が心身の苦痛を感じているもの」と定義されている。※小学校、中学校、高等学校、中等教育学校及び特別支援学校（幼稚部を除く）。また同法案は、「いじめの防止等のための対策の基本理念、いじめの禁止、関係者の責務等」を定めている。

これまでのいじめに関する研究では、いじめを防止するための手掛かりを得るために、いじめの様態、いじめの発生機序、いじめ被害者および加害者の個人的特性等を明らかにすることを試みた研究が多く行われてきた（例えば、神村・向井、1998；Olweus, 1995；Pellegrini, 1998；鈴木、1995など）。最近は、いじめ被害を受けた人のその後注目する研究が行われ始めている。その中で森本（2004）は、いじめ被害を受けた人が積極的自力克服の対処を選ぶ場合他者尊重や精神的強さなどにプラスの影響が見られ、他方、無抵抗、従順の対処を選ぶ場合情緒的不安定や他者への過敏などのマイナスの影響があるとしている。そして八田（2007）は、いじめ被害経験の原因帰属は、当時のいじめへの対処方法や、被害経験後の心的状況に少なからぬ影響を与えることが考えられると述べている。

注目すべきこととしていじめを受けた被害者が、後

1 東京成徳大学大学院

2 東京成徳大学

にいじめを行う加害者へと変わるといったケースが起きている。本間（2003）は、「いじめをしたことがある」層は「過去にいじめ体験あり（被害経験を含む）」が88.5%あることを報告している。また田中（2009）は、いじめ経験者は約9割に「過去いじめた、あるいはいじめられた経験あり」と報告している。

Hazler & Carney（2000）は、暴力やいじめの被害にあった子どもが後に加害者になる問題を指摘している。また橋本（2008）は、加害行為に及んだ要因にはさまざまな要因が複合しているが、その要因の一つに被害者性があると述べている。そして内藤（2009）によれば、いじめを受けた者がいじめを行うことは、一種の「癒しの作業」になると述べている。

このようないじめの連鎖を説明する理論としては、淡野（2010）の指摘する「置き換えられた攻撃理論」（TDA 理論 Triggered Displaced Aggression）がある。つまり一定の挑発事象を経験し、攻撃に関連する感情や認知が活性化したり事象に対する帰属の歪みが生みだされたりした結果、その後別の誘発事象を経験すると、敵意的に解釈をして攻撃が置き換えて現れるといった考えである。また、いじめの連鎖を説明するもう一つに、内藤（2009）の指摘する投影的同一視、つまりいじめを受けた時の「弱い自分」に代わって、いじめをすることにより「強い自分」を取り入れることができるといった考え方がある。

こうしたことから、いじめ被害を受けた時、攻撃に関連する感情や認知が軽減されたり、帰属や自己認知の歪みが是正されたりするようなケアが必要と考えられる。生徒への対応やケアについて國分（1987）は、生徒の悩みに対する教師の受容的態度のもとで、生徒がありのままの自分の気持ちを出し、それによって鬱積した感情が浄化され、いじめに対する自己内省と教師のアドバイスに耳を傾ける関係づくりが求められると述べている。

以上のことを踏まえ、いじめを受けたときの被害者へのケアに着目し、どのようなケアをどのような人物から受ければ、いじめの連鎖に歯止めがかかるかについて研究を行った。そこで、本研究は大学生を対象に小学生高学年・中学生の時のいじめを回想してもらい、いじめの連鎖を止める手掛かりを見つけない。いじめの発生件数、発生率とも中学が最も多い（内閣府、2002）ことや、いじめの経験を受けてから一定の年数を経てやや冷静に振り返ることのできる可能性を考慮して、大学生を対象に小学生高学年・中学生の時を回想して回答してもらい、量的分析・質的分析を通していじめの連鎖の歯止めについての示唆を得ることを目的とする。

方 法

1. 調査対象者

調査対象者は、首都圏の私立 A 大学, B 大学, C 大学, D 大学の計383人中、有効回答341人であった。内訳は男性172名、女性169名であった。

2. 調査時期

平成27年5月15日~7月16日であった。

3. 調査方法

選択と自由記述調査で実施した。調査はいずれも無記名で行われ、実施時間は約10～20分であった。

調査への参加は自由意志に基づくものであること、回答を途中で中断することが可能であること、といった調査内容に関する説明を行い、同意を得た上で調査を実施した。質問紙を講義の時間に配布し、回収した。なお、本調査は東京成徳大学大学院心理学研究科の研究倫理審査において承認されている（承認番号15-1-2）。

4. 調査内容

調査で用いた調査用紙の構成は以下の通りである。

①基本的属性

調査対象者の属性として、性別・学年を尋ねた。

②自由記述による質問紙内容

質問内容は以下の通りである。

質問 Q 1. 小学生高学年・中学生時代にいじめを受けたときの周囲の対応（ケア）の具体的な内容とその対応（ケア）に対する満足点（0～100点）を尋ねた。いじめを受けた経験のない人には想像して回答するように指示をした。

質問 Q1-1. 家族からどのような対応を受けたか。また、その対応の満足点を尋ねた。

質問 Q1-2. 学校の先生からどのような対応を受けたか。また、その対応の満足点を尋ねた。

質問 Q1-3. 友達からどのような対応を受けたか。また、その対応の満足点を尋ねた。

質問 Q1-4. 家族・学校の先生・友達以外の人からどのような対応を受けたか。また、その対応の満足点を尋ねた。

質問 Q2. いじめを受けた人がその後いじめる側になることについて、いじめを受けた人がどのような対応を受けるといじめる側になるか尋ねた。

質問 Q3. いじめを受けた人がその後いじめる側にならないことについて、いじめを受けた人がどのような対応を受けるといじめる側にならないか尋ねた。

質問 Q4. 小学生高学年・中学生時代にいじめられ、その後いじめる側になったことがあるかどうかを「あった・どちらかといえばあった・なかった」のうち一つを選んでもらった。

5. 分析方法

量的データは分散分析とt検定、質的データは、KJ法にならった分析をした。質的データとなる自由記述回答は、筆者と分析協力者5名（心理学研究科大学院生）で分類した。自由記述の分析は以下の手続きで行った。

1. 自由記述の回答をすべて Excel に入力した。
2. 質問項目（前述した Q1～Q3の質問項目）ごとに回答を切片化した。その結果、切片は1846件であった。切片化は、記述内容から記入者の意図を判断し、文脈を損なわないように行った。
3. 筆者と分析協力者5名で、得られた切片の類似性を考慮し、質問項目ごとに、用紙に分けて切片を貼っていき、グループ化を行った。
4. 各グループ間の関係性を判断して、構造図を作成した。

結 果

いじめられたことに対して実際に周囲からのケアを受けて回答した場合を「現実」とし、想像して回答した場合を「想像」と分けて結果を分析した。

1. 量的分析

各ケアの項目の満足点について分析を行った。

Table1は各ケアの現実と想像の平均値を示している。現実場面の4つのケアの平均点について分散分析をした結果、 $F(3, 311) = 16.54$ 、となり0.1%水準で有意であった。また、Tukey法による多重比較をした結果、「先生」と「家族」・「友達」・「その他」との差が0.1%水準で有意であった。このことより、「先生」のケアの満足点が他のものよりも有意に低いことがわかった。

他方、想像場面の4つのケアの平均点について分散分析をした結果、 $F(3, 486) = 4.16$ 、となり1%水準で有意であった。また、Tukey法による多重比較をした結果、「先生」と「友達」・「その他」との差が5%水準で有意であり、「家族」との差が10%水準で有意傾向であった。このことから、想像場面においても「先生」のケアの満足点が低いことがわかる。

Table2は、いじめられた後にいじめる側になったことがあるかを示している。「あった」と「どちらかといえばあった」を合わせると25%あり、4人に1人があったと回答している。

Table3は「いじめる側になったことがある」と「どちらかといえばあった」と回答したものをいじめる側となったことが有群とし、「なかった」と回答したものをいじめる側となったことが無群と分け、現実の各ケアの満足点を比較したものである。その結果、いずれのケアの満足点も有無群で有意な差が認められなかった。

Table4は想像の各ケアの満足点を有無群で比較し

たものである。その結果、いずれのケアの満足点も有無群で有意な差が認められなかった。

2. 質的分析

KJ法にならった分析を行った。

(1) いじめを受けた時の家族からの対応（現実）

内容の重複したものも含め、合計145件の切片が得られた。それらの切片のグループ化とその関係性を検討した結果、Figure1の構造図が得られた。

この構造図は「受動的にケアをしてくれる（46件）」、「解決に向けたケア（36件）」、「気もちを汲み取らない言葉をかけられる（29件）」、「気もちを汲み取るケア（17件）」、「考える時間をくれる（12件）」、「自分の味方になってもらう（4件）」、「紳士といった対応（1件）」に

Table1 各ケアの得点の平均とSD

		平均値	SD
家族	現実	47.66	36.19
	想像	62.55	27.50
先生	現実	25.75	32.25
	想像	53.86	26.33
友達	現実	66.50	26.28
	想像	63.62	28.20
その他	現実	70.34	26.92
	想像	66.58	24.58

Table2 いじめられた後にいじめる側になったことがあるか

あった	どちらかといえばあった	なかった
37人(11%)	49人(14%)	255人(75%)

Table3 いじめる側になった有無群の各ケア満足点の比較（現実）

		平均値	SD	t値
家族	有	65.53	26.81	0.79 n.s.
	無	61.22	27.89	
先生	有	41.06	35.03	0.11 n.s.
	無	40.24	30.33	
友達	有	65.64	28.34	-0.31 n.s.
	無	67.26	24.57	
その他	有	71.25	22.95	0.12 n.s.
	無	70.00	28.81	

Table4 いじめる側になった有無群の各ケア満足点の比較（想像）

		平均値	SD	t値
家族	有	70.77	30.13	1.13 n.s.
	無	61.74	27.22	
先生	有	43.44	31.13	-1.58 n.s.
	無	56.22	24.58	
友達	有	64.17	28.43	0.07 n.s.
	無	63.57	28.30	
その他	有	70.88	21.81	0.81 n.s.
	無	65.40	25.32	

分類された。

主な関係性として「受容的にケアをしてくれる」から「自分の味方になってもらう」というケアがあり、「気持ちを汲み取るケア」というケアが相互的に関係していると考えられ、「気持ちを汲み取らない言葉をかけられる」とでは相反するケアであることが考えられた。また、「解決に向けたケア」から「自分の味方になってもらう」というケアがあり、「考える時間をくれる」というケアが相互的に関係していると考えられた。

以上のように、受容的にケアをしてくれる、解決に向けたケア、気持ちを汲み取るケアといった被害者を受け入れて受容するようなケアと気持ちを汲み取らずに言葉をかけてしまうケアが中心にされていると考えられる。特に受容的にケアをしてくれるは46件あり、最も多く行われているケアである。



Figure1 いじめを受けた時の家族からの対応（現実）

(2) いじめを受けた時の家族からの対応（想像）

内容の重複したものも含め、合計181件の切片が得られた。それらの切片のグループ化とその関係性を検討した結果、Figure2の構造図が得られた。

この構造図は「話を聞いてもらう（80件）」、「気持ちを汲み取らない言葉をかけられる（30件）」、「共感的な気持ちでケアをしてくれる（26件）」、「対処的にケア（23件）」、「気持ちを奮い立たせてくれる（15件）」、「ケアをしない（7件）」に分類された。

主な関係性として「話を聞いてもらう」から「対処的にケア」というケアがあり、「共感的な気持ちでケアをしてくれる」と「気持ちを奮い立たせてくれる」が相互的に関係していると考えられた。また、「気持ちを汲み取らない言葉をかけられる」と「ケアをしない」とが相互的に関係していると考えられ、「共感的な気持ちでケアをしてくれる」と「対処的にケア」とでは相反するケアであることが考えられた。

以上のように、話を聞いてもらう、共感的な気持ちでケアをしてくれるといった被害者を受け入れて受容するようなケアと気持ちを汲み取らずに言葉をかけてしまうケアが中心にされていると考えられる。特に話を聞いてもらうことは80件あり、最も多く行われているケアである。

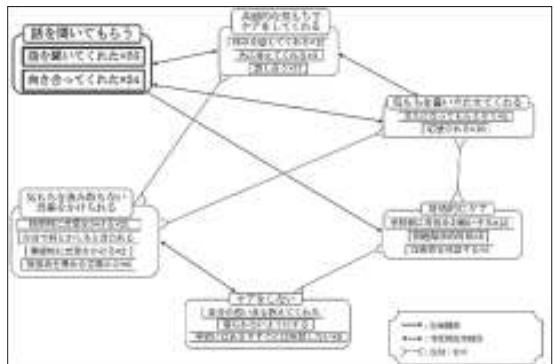


Figure2 いじめを受けた時の家族からの対応（想像）

(3) いじめを受けた時の学校の先生からの対応（現実）
内容の重複したものも含め、合計106件の切片が得られた。それらの切片のグループ化とその関係性を検討した結果、Figure3の構造図が得られた。

この構造図は「気持ちを支えるケア（38件）」、「解決に向けたケア（38件）」、「ケアをしなかった（10件）」、「いじめを防止する（5件）」、「言葉をもらう（5件）」、「指示的アドバイス（4件）」、「問題から目をそらすケア（3件）」、「先生が全て対処してくれた（1件）」、「仕事として対応した（1件）」、「いじめた方をかばった（1件）」に分類された。

主な関係性として「気持ちを支えるケア」の中にある小グループ「話を聞いてくれる」から「指示的アドバイス」というケアがあり、「言葉をもらう」から「気持ちを支えるケア」というケアがあることが考えられ、「気持ちを支えるケア」と「解決に向けたケア」とが相互的に関係していると考えられた。また、「解決に向けたケア」と「指示的アドバイス」・「先生が全て対処してくれた」・「仕事として対応した」というケアが相互的に関係していると考えられ、「解決に向けたケア」と「問題から目をそらすケア」とでは相反する関係であることが考えられた。

以上のように、気持ちを支えるケア、解決に向けたケア、ケアをしなかった、いじめを防止する、言葉をもらうといった被害者を受け入れて受容するようなケアやいじめを解決することを目的としたケアがあるこ

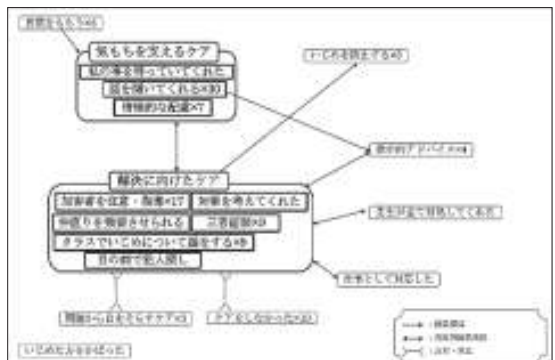


Figure3 いじめを受けた時の学校の先生からの対応（現実）

する(4件)」に分類された。

主な関係性として「気持ちを理解する」から「解決に向けたケア」があり、「言葉をかけてもらう」から「気持ちを理解する」というケアがあることが考えられ、「気持ちを理解する」と「情緒的なケア」が相互的に関係していると考えられた。また、「解決に向けたケア」と「いじめ発生を予防する」というケアが相互的に関係していると考えられ、「問題から目をそらすケア」や「ケアをしない」とでは相反する関係であることが考えられた。

以上のように、気持ちを理解する、解決に向けたケア、情緒的なケア、言葉をかけてもらうといった被害者の気持ちを受け入れて受容するようなケアやいじめを解決することを目的としたケアがあることが考えられる。特に気持ちを理解するは73件あり、解決に向けたケアは54件と共に多く、共に多く行われているケアである。

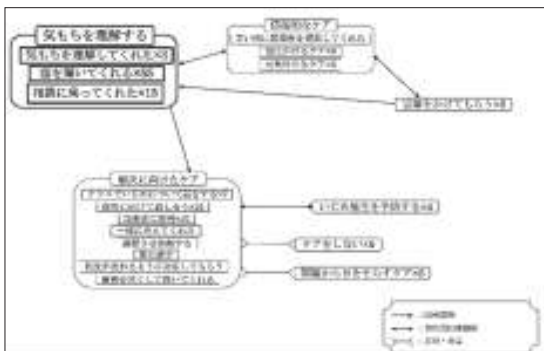


Figure4 いじめを受けた時の学校の先生からの対応(想像)

(5) いじめを受けた時の友達からの対応(現実)

内容の重複したものも含め、合計134件の切片が得られた。それらの切片のグループ化とその関係性を検討した結果、Figure5の構造図が得られた。

この構造図は「共感的な話し合い(35件)」、「味方になる(29件)」、「日常的な交流のケア(28件)」、「解決に向かう共感的ケア(19件)」、「情緒的なサポート(14件)」、「ケアを受けなかった(9件)」に分類された。

主な関係性として「共感的な話し合い」と「味方になる」というケアが相互的に関係していると考えられ、「共感的な話し合い」から「解決に向かう共感的ケア」というケアがあることが考えられ、「情緒的なサポート」から「共感的な話し合い」というケアがあることが考えられた。また、「味方になる」と「日常的な交流のケア」、「解決に向かう共感的ケア」、「情緒的なサポート」と、それぞれが相互的に関係していると考えられた。

以上のように、共感的な話し合い、味方になる、日常的な交流のケア、解決に向かう共感的ケアといった被害者に共感し、そばにいたり味方になるようなケアが中心にされていると考えられる。特に共感的な

話し合いは35件あり、味方になるは29件と共に多く、共に多く行われているケアである。

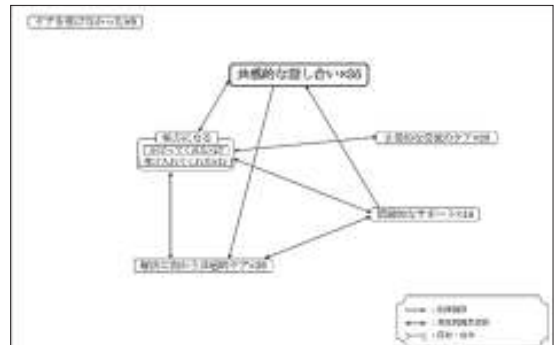


Figure5 いじめを受けた時の友達からの対応(現実)

(6) いじめを受けた時の友達からの対応(想像)

内容の重複したものも含め、合計167件の切片が得られた。それらの切片のグループ化とその関係性を検討した結果、Figure6の構造図が得られた。

この構造図は「気持ちに共感して慰めてくれる(95件)」、「解決に向けたケア(29件)」、「気持ちを察して支えてくれるケア(13件)」、「味方になる(12件)」、「日常的に一緒に交流することでケアをする(9件)」、「関与してくれない(9件)」に分類された。

主な関係性として「気持ちに共感して慰めてくれる」は、「解決に向けたケア」、「味方になる」というケアに繋がり、「気持ちを察して支えてくれるケア」とは相互的に関係していると考えられた。また、「気持ちを察して支えてくれるケア」と「味方になる」から「解決に向けたケア」があると考えられた。

以上のように、気持ちに共感して慰めてくれる、解決に向けたケア気持ちを察して支えてくれるケアといった被害者に共感し、解決に向けたケアが中心にされていると考えられる。特に共感的なケアは95件あり、多く行われているケアである。

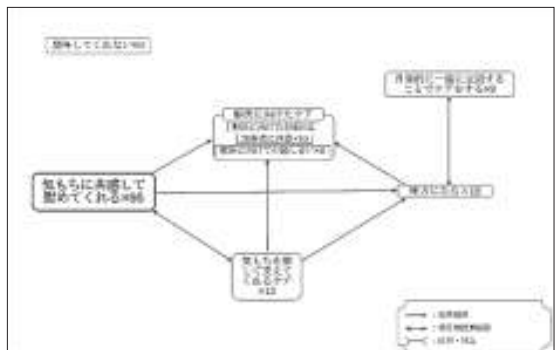


Figure6 いじめを受けた時の友達からの対応(想像)

(7) いじめを受けた時の家族・学校の先生・友達以外の人からの対応(現実)

内容の重複したものも含め、合計40件の切片が得られ、その中から本研究に関係のあるものを抽出し38件

の切片が得られた。なお、どのような人物からどのようなケアが得られたかについて示すために、Table5のような表を作成した。

カウンセラー（以後 Co と表記）やスクールカウンセラー（以後 SC と表記）といった専門家からのケアが多く、内容としても専門的に相談することやカウンセリングすることなどが中心となるケアである。

Table5 いじめを受けた時の家族・学校の先生・友達以外の人からの対応（現実）

人物	内容
加害者の親×1	謝罪
保健室の先生×1	教室に行かせようとした・保健室に連れてくれた
Co×2	食料もなかった・体を動かさずフリースペースにいった・苦害しない・話を聞いてくれる・アドバイスをした・学校を退学するのは間違っていないと言う
ママ友達×1	学校に連れてくれた
友人の父×1	色々話を聞いた・助けてくれた とてもる強い人なのかもしれないと言われた・相談・先生に伝えてもらった・カウンセリング
SC×3	話を聞いてくれた
ネットで見つけた人×1	話を聞いてくれた
養育師×3	話を聞いてくれた
友達×3	話を聞いてくれた
曾からの知り合い×1	転校の準備をしてくれた
友人の母×1	話を聞いてくれた
ピアノの先生×1	話を聞いてくれた・話を聞いてくれた
母の先生×4	話を聞いてもらう×3・話を聞いてくれた・一緒に解決策を出してくれた・考えなくていいと言ってくれた
病院の先生×1	親身になって話を聞いてくれた
臨床心理士×1	
精神科病院医長×1	アドバイスしてくれた・親のケアも忘れなかった
母×2	話を聞いてもらう・そんなのほっときなと言ってくれた・間が狭い・すごく優しい・くれた
古い師×1	話し合い
教育相談×1	相談

(8) いじめを受けた時の家族・学校の先生・友達以外の人からの対応（想像）

内容の重複したものも含め、合計108件の切片が得られ、その中から本研究に関係のあるものを抽出し94件の切片が得られた。なお、第7項と同様にその結果

Table6 いじめを受けた時の家族・学校の先生・友達以外の人からの対応（想像）

人物	内容
養育者×1	大人になつたんだとしたくなる 種類に乗って来る×3・ちゃんとした対応をとってくれた・話を聞いてもらう×3・解決策を一緒に考えてもらう・道徳になってくれる・性悪してくれ×2・差別になってくれる・色んな薬を渡す・心のケアをしてくれる×2・休ませる
Co×3	話を聞いてもらう×3・アドバイスしてくれる・怒めてくれる・協力してくれる・気持ちを受け取ってくれた
SC×4	クラスへ働きかけ・種類によってもらう×4・解決策を一緒に考えてもらう
養育のおおきあちゃん×1	優しく話をかけてくれる・話を聞いてくれる×3
母×1	聞いてくれる・話を聞いてくれる・聞いてくれる
近所のあきらさん×1	いつでも話を聞いてくれる
いじめの相手×1	お前がOQが低く原因だと言う
親戚×1	学校へ行けば解決すると言う
ネットの人×3	話を聞いてくれる・対応策を具体的に教えてくれる・道徳に流された悪影響について言ってくれる
祖父、祖母×1	気持ちも全一精神的にやわらげる・客観的に自分を受け止める様にしてきた
病院の人×1	
警察×2	加害者の意識に警戒心をあたえた・電話相談
クラブのコーチ×1	怒られた
知り合い×2	話を聞いてくれた×2
養育者×1	聞かせる
母親の先生×3	話を聞いてもらう
母親の友人×3	話を聞いてもらう
母の先生×4	話を聞いてもらう×3・聞いてもらう・解決策を提案される
祖母のおじさん×2	話を聞いてくれた×2 話を聞いてくれた
友達×3	先兆察知してくれた×3・聞いて聞いてもらう
先輩×3	話を聞いてもらう・親なる事象への助成・社教し
治療の人×4	声をかけられたし・話を聞いてもらった×2・学校での治療を受ける事に付いてくれる
親戚の親戚×1	話を聞いてくれる
友達×1	話を聞いてくれる・やがてどうすればいいか教えてくれる
医者×1	話を聞いてくれる
先輩×2	先兆察知をさせてくれる・時に涙目になられた
先生×1	学校に行く手強い・勉強の手強い
祖父×1	やり直すと案外いい
先輩職員×3	話を聞いてくれる・話を聞いてもらう
電話相談×2	相談できる・話を聞いてもらう

を Table6 に示す。

Table5の現実と同じように Co や SC と呼んだ専門家からのケアが多く、内容としても専門的に相談することやカウンセリングすることなどが中心となるケアである。

(9) いじめ被害者が加害者へと変化する対応

内容の重複したものも含め、合計435件の切片が得られた。それらの切片のグルーピングとその関係性を検討した結果、Figure7の構造図が得られた。

この構造図は「周りからの不完全なケア（118件）」、「周りに受け入れられなかった（105件）」、「責任の帰属（61件）」、「パーソナリティでの違い（50件）」、「加害者になる動機（42件）」、「状況の変化（31件）」、「いじめによる影響（18件）」、「わからない・否定（7件）」、「カウンセリングをしない（1件）」、「いじめを受けている人に対して何もなかった（1件）」に分類された。

主な関係性として「周りからの不完全なケア」から「加害者になる動機」があり、「パーソナリティでの違い」から「周りからの不完全なケア」があり、「周りからの不完全なケア」と「責任の帰属」とが相互的に関係していると考えられ、「周りからの不完全なケア」と「周りに受け入れられなかった」、「カウンセリングをしない」、「いじめを受けている人に対して何もなかった」のそれぞれと相反する関係であることが考えられた。また、「周りに受け入れられなかった」は、「加害者になる動機」に繋がり、「責任の帰属」、「パーソナリティでの違い」、「いじめによる影響」、「カウンセリングをしない」、「いじめを受けている人に対して何もなかった」のそれぞれと相互的に関係していると考えられた。

以上のように、周りからの不完全なケア、周りに受け入れられなかった、責任の帰属といった被害者の気持ちを受け入れず、曖昧なケアや被害者に合わないケアが中心と考えられる。その中でも周りからの不完全なケアが118件、周りに受け入れられなかったが105件と多く、これらがいじめの側に変わるケアであると推察される。

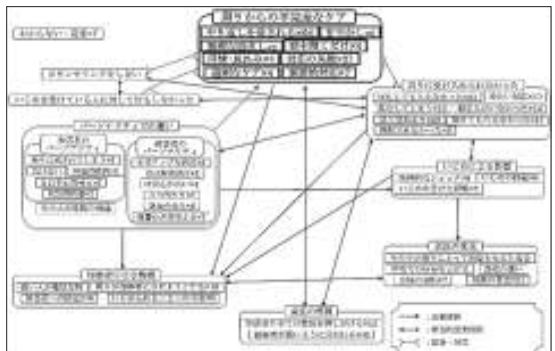


Figure7 いじめ被害者が加害者へと変化する対応

(10) いじめ被害者が加害者へと変化するしない対応

内容の重複したものも含め、合計368件の切片が得られた。それらの切片のグルーピングとその関係性を検討した結果、Figure8の構造図が得られた。

この構造図は「実際の対応 (92件)」、「いじめ再発防止的関わり (47件)」、「加害者になることへの抵抗要因 (42件)」、「いじめの適切な対応 (42件)」、「受容・共感的ケア (38件)」、「周囲からのサポート (37件)」、「いじめから遠ざける (35件)」、「被害者の内省 (16件)」、「ポジティブな対処 (7件)」、「環境の変化 (6件)」、「生徒の立場 (1件)」、「一人の時間が少なかった (1件)」、「ケアする側に伝える (1件)」、「ケアを一切受けない (1件)」分類された。

主な関係性として「実際の対応」から「いじめの適切な対応」、「いじめから遠ざける」というケアがあり、「いじめ再発防止的関わり」、「周囲からのサポート」から「実際の対応」というケアがあり、「実際の対応」と「ポジティブな対処」というケアが相互的に関係していると考えられ、「実際の対応」と「環境の変化」、「ケアを一切受けない」のそれぞれと相反する関係であることが考えられた。また、「周囲からのサポート」、「生徒の立場」から「いじめ再発防止的関わり」というケアがあり、「いじめ再発防止的関わり」から「加害者になることへの抵抗要因」、「いじめの適切な対応」、「被害者の内省」があり、「いじめ再発防止的関わり」と「受容・共感的ケア」が相互的に関係していると考えられた。

以上のように、実際の対応、いじめ再発防止的関わり、加害者になることへの抵抗要因、被害者の気持ちに共感し、具体的にいじめに対応し、周囲の人からのポジティブなサポートのケアが中心と考えられる。特に「実際の対応」の中で話を聞いてもらう対応が34件と最も多く、これらがいじめる側にならないケアであると推察される。

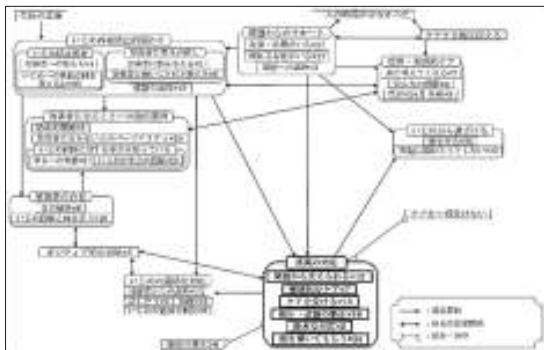


Figure8 いじめ被害者が加害者へと変化しない対応

考 察

本研究で得られた主な結果は次の通りである。

まず量的分析からは、①約4分の1の人がいじめられた後にいじめる側になったと回答している。『現実及

び想像場面において、先生のケアに対する得点が家族、友達、その他（専門家など）のケアよりも低い。③いじめられた後に、いじめる側になった人とならなかった人との間に、家族、先生、友達、その他のケアに対する満足点の違いが見られなかった。

質的分析からは、①いじめ被害者が加害者へと変化する周囲のケアの仕方として、「周りからの不完全なケア」、「周りに受け入れられなかった」、「責任の帰属」、「パーソナリティでの違い」、「加害者になる動機」、「状況の変化」、「いじめによる影響」、「わからない・否定」の関わりが見られた。②いじめ被害者が加害者へと変化しない周囲のケアの仕方として、「実際の対応」、「いじめ再発防止的関わり」、「加害者になることへの抵抗要因」、「いじめの適切な対応」、「受容・共感的ケア」、「周囲からのサポート」、「いじめから遠ざける」、「被害者の内省」、「ポジティブな対処」、「環境の変化」の関わりが見られた。

これらの結果に考察を加える。まず、本研究では約4分の1の人がいじめられた後にいじめる側になったと回答があった。これは本間（2003）や田中（2009）のいじめ被害者の約9割の人がいじめられた経験があるとしている記述よりもずいぶん低い数値となっている。このことは、今後さらに検討していきたい。

先生のケアに対する満足点が他の人の点数よりも低かったことについては、質的分析において先生のケアの内容と他の人のケアの内容とに違いが見受けられなかったことから、先生への期待の高さゆえとも考えられる。つまり、いじめを受けた時に先生に対応してほしいと強く望むので、先生が他の人と同じ対応をしたら、それは失望へと変わる可能性が大きいと思われる。

次に、いじめ被害者が加害者へと変化する周囲の対応の仕方を見ると、周りからの不完全なケアや周りに受け入れられなかったこと、責任の帰属といった被害者の気持ちを受け入れず、曖昧なケアや被害者に合わないケアがあること、やり直すことを促すといった言葉かけなどがみられた。このように、周りからの不完全なケアや周りに受け入れられなかったことが加害者へと変わらせる対応であると示唆された。

他方、いじめ被害者が加害者へと変化しない周囲の対応の仕方では、話を聞いてもらう対応やいじめ再発防止的関わり、加害者になることへの抵抗要因、被害者の気持ちに共感し、周囲の人からのポジティブなサポートのケアがみられた。実際にいじめに適切に対応し、なおかつ被害者の気持ちに共感し加害者にいじめを再発させないように関わるのがいじめ被害者が加害者へと変化しない対応と示唆された。

しかし、今回の研究では実際にいじめ被害側から加害側へと変わったというケースが少ない上に、各ケアの具体的な内容が個々のサンプルによって変わるため、明白な結果が得られなかった。また、質問紙にお

いて被害者から加害者へと変化することに回答することへの心理的抵抗もあると考えられた。

以上のことから、調査対象者が自身のことを正直に回答し易い雰囲気のもとで質問紙を実施することや、小中学生の時の気もちと現在の気もちに相違があることを考慮した研究をする必要があると考えられる。

文 献

- 橋本和明 (2008). 加害者の被害者性 現代のエスプリ 491, 56-63.
- 八田純子 (2008). いじめ被害経験者の原因帰属および対処法 愛知学院大学論叢心身科学部紀要 3, 89-94.
- Hazler, R.J., & Carney, J. V. (2000). When victims turn aggressors : Factors in the development of deadly school violence. *Professional School Counseling*, 4, 105-112.
- 本間友巳 (2003). 中学生におけるいじめの停止に関連する要因といじめ加害者への対応 教育心理学研究 51 (4), 390-400.
- 神村栄一・向井隆代 (1998). 学校のいじめに関する最近の研究動向—国内の実証的研究から— カウンセリング研究 31, 190-201.
- 國分康孝 (1987). 学校カウンセリングの基本問題

誠信書房

- 文部科学省 (2013). いじめ防止対策推進法の公布について
- 文部科学省 (2014). 平成25年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」について
- 森本幸子 (2004). 過去のいじめ体験における対処法と心的影響に関する研究 心理臨床学研究 22 (4), 441-446.
- 内閣府 (2002). 青少年白書 平成14年度版
- 内藤朝雄 (2009). いじめの構造 なぜ人が怪物になるのか 講談社現代新書
- Olweus, D. (松井資夫・角山剛・都築幸恵 訳) (1995). いじめ—こうすれば防げる— 川島書店
- Pellegrini, A.D. (1998). Bullies and victims in school : A review and call for research. *Journal of Applied Developmental Psychology*, 19, 165-176.
- 鈴木康平 (1995). 学校におけるいじめ 教育心理学年報 34, 132-142.
- 田中美子 (2009). いじめ発生及び深刻化のシステム論的考察 千葉商大論叢 47 (1), 31-63.
- 淡野将太 (2010). 置き換えられた攻撃研究の変遷 教育心理学研究 58 (1), 108-120.

—2016.1.24受稿, 2016.3.12受理—

What Kind of Care and from who should the Victim of Bullying Receive Care? Who Controls the Chain of Bullying ?

Kurimoto AKIRA (*Graduate School of Psychology Tokyo Seitoku University*)

Kunijiro ARAI (*Tokyo Seitoku University*)

This study clarifies the following notions: (1) what kind of care and from who should the victim of bullying receive care? And, (2) who controls the chain of bullying.” The subjects comprised 341 university students (172 male and 169 female). The questionnaire method was employed to ascertain their bullying experiences when they were students in upper elementary and junior high school.

The main results determined by a quantitative analysis were as follows: (1)A quarter of the victims of bullying turned into bullies later.(2)Satisfaction of the care received from school teachers was lower than that of family, friends, and others such as the school counselor.

The main results of a qualitative analysis were as follows:(1)On the one hand, when the victim of bullying turned into an assailant later, the following aspects of care were evident: providing incomplete care, providing care without accepting the victim, providing vague care, providing care of words to promote revenge and providing mismatched care to the victim.(2)On the other hand, when the victim of bullying did not turn into an assailant later, the following aspects of care were evident: providing care with active listening, adopting preventive measures for bullying recurrence, aiding with resistance factors for turning into an assailant, providing sympathy for the victim’ s feeling and providing positive support to the victim. Based on the results, a suggestion was provided about the care required to prevent the victim from turning into an assailant later.

Key words: victim of bullying, assailant of bullying, chain of bullying, care for the victim of bullying

Bulletin of Clinical Psychology, Tokyo Seitoku University
2016, Vol. 16, pp.1-9